

精神医学研究の在り方：当事者・家族の思いを踏まえて

| 尾崎 紀夫 Norio Ozaki

2023年4月、日本精神神経学会を含む12学会は「精神疾患の克服と障害支援にむけた研究推進の提言」を発表し、同年6月にはその当事者・家族・一般向け版を発出した。2023年の提言では「当事者・家族のニーズに適う成果につなげる研究」という観点がこれまで以上に強調されている。また、当学会の研究提言としては2013年、2018年に次いで3回目だが、2018年の提言に基づく当事者・家族・一般向け版は2020年3月に発出され、2013年の提言に基づく当事者・家族・一般向け版はなかった。さらに2023年の提言および2つの当事者・家族・一般向け版はすべて、当事者・家族の立場である夏苺郁子先生の協力を得て作成された。当学会は当事者参加の方向性を明確化しているが³⁾、研究提言でも当事者・家族のニーズを重視し、その内容を広く共有する方向性を、この10年で強めている。

著者は「心への興味関心」から精神科医になるために医学部に進学し、卒業後、「知りたい」との気持ちから、例えば、腎移植後の患者が他者（多くは両親から）の腎臓をどのようなプロセスを経て心理的に統合するのかを検討し、論文にまとめた。しかし、臨床経験を積むなかで、当事者・家族が診療で感じる疑問や問題を知り、研究を通じて彼らの思いに応えたいと考えるようになった。

例えば、著者は以下のような経験をした。当事者が薬に関する悩みを主治医に相談することをロールプレイで訓練したうえで実践するSSTプログラムを行っていた際、複数の当事者から「性機能障害で悩んでいた」ことを打ち明けられた。「性機能障害」は言葉にしづらいが、多くの当事者が悩んでいることが判明したため、「言葉にしなくても良い、また答えやすい性機能障害の質問紙の開発」「質問紙と血中プロラクチン測定による調査結果によると、統合失調症当事者は性機能障害の頻度が高く、そのなかには高プロラクチン血症を呈している割合も多い」「アリピプラゾールの追加投与で高プロラクチン血症の改善とともに、

性機能障害も軽快する」という研究成果を3つの論文としてまとめ、当事者・家族向けの情報発信にも活用した⁴⁾。

これらの経験をもとに、著者はAMED事業の一環として、当事者・家族を対象に精神医学研究に関するアンケート調査を行っている。本調査の立案段階から当事者・家族会の協力を得て、アンケートの項目や形式などについて有益な意見が寄せられ、調査を進めた。その結果、1,022名の当事者・家族から回答を得て、当事者・家族が発展を望む分野については、「病態解明研究（72%）」の発展を望む声が多く、次いで「新規治療法の開発（69%）」への期待が多いことを確認した¹⁾。さらに、夏苺郁子先生から、『100人の理解者・支援者よりも、母を治してくれる1錠の薬が欲しい』が、患者・家族としての本当の願いであった²⁾。原因がわからない病気ゆえに、精神疾患への偏見は解消されていない。当事者・家族は「創薬」への期待を諦めるわけにはいきません！との思いも伺った。

当事者・家族の思いを踏まえた、「診療で生じる課題の解決」および「精神疾患の病態解明と、それに基づく診断、治療法の開発」の実現のためには、人材育成を含め、いまだ多くの課題がある。研究者、臨床医、当事者・家族の連携が不可欠であり、会員の皆様のご理解・ご協力をお願いする次第である。

- 1) 中村由嘉子, 木野内 南, 尾崎紀夫: 当事者・家族が精神医学の研究に望むこと—アンケート調査の結果から—。精神経誌, 126 (4); 251-262, 2024
- 2) 夏苺郁子: 石塚論文『「遺伝」を継承と多様性で語る精神科医療に』を読んで—当事者・家族の立場から補足すること—。精神経誌, 122 (7); 509-513, 2020
- 3) 尾崎紀夫: 日本精神神経学会における当事者参加の動向。精神経誌, 124 (12); 837, 2022
- 4) 尾崎紀夫: 高プロラクチン血症の研究は当事者の困りごとがスタート。こころの元気+, 209 (7); 40-41, 2024